

# 幼稚園四十年(一)

菊池ふじの



はじめに

昭和三十九年四月、改訂幼稚園教育要領の実施をきっかけに、我が国の幼稚園教育の必要が大きく世論の注目を惹き、同時に国も文教施策としてこの幼児教育に本腰を入れ、着々その計画が実を結ぶようになってきた折も折、本年は幼稚園創設九十周年に当たるので、来たる十一月の十五、十六の両日にわたって、幼児教育界挙げての祝典が、文部省主催の下に着々その計画が進められているようである。

幼稚園創設の初期においては、創設園である現在のお茶の水女子大学の附属幼稚園が日本の幼稚園を代表するかの如き状態であり、したがってお茶の水幼稚園の歴史がとりもなおさず日本の幼稚園史でもあったのである。

この創設幼稚園の、いふなれば外郭団体であったフレールベル会(大正七年日本幼稚園協会と改称)が、明治三十四年一月二十九日創刊して以来、今日まで六十五年もの長い間、わがお茶の水幼稚園と親と子のような密接な関係を保ちつつ連綿としてつづいてきたいまの「幼児の教育」―昔は「婦人と子ども」―という誌名としても、この九十周年の記念すべきときに、このことについて無関心であるわけはなく、記念誌としての編集をもうはじめています。

私に執筆の「大命」が降ったのも、一に幼稚園九十年の歩みの約半ばを、このお茶の水の幼稚園で子どもらとともに歩んできたから、という理由によるらしい。

私にとって原稿を書くということは、年令を重ねるにしたがって重荷になってきている。原稿を引きうけたばかりに、日曜

ごとに集まってくる近親者たちを快く迎える気持になれず、  
切の迫っているときなどは、早く帰っていつてくれればと希う  
悲愴な気持にさえなることは、とても堪えられないことであ  
る。それがために近來はよくよくの事情でもなければ原稿は一  
切おことわりをして、余生幾ばくもない今日あすの日を、追い  
つめられるということのない平和ななごやかな気持で暮したい  
とねがっているのである。

しかし、この度の「大命」はそう簡単に断れるすじあいのも  
のではないとも思った。というのは、恩師倉橋惣三先生と先輩  
新庄よしこ先生との共著「日本幼稚園史」は、本園の創設当時から  
明治二十年までをまとめていらっしやる。してみるとそのあ  
とのこの園の有様は誰がつづけるだろう？ せっかく明治の二  
十年までがあるのだからそのつづきもあって然るべきだ。い  
や残しておかなければならない。この園に職を奉じて、じぎじ  
きに子どもたちと明け暮れを共にしてきた者の中では、まわり  
を見渡すと、ほかの方々と比べものにならないほどに私が一ぱ  
ん長い。してみるとそれは自分がしなければならぬのではな  
いか、などと思ったこともあった。しかしその役を買って出る  
には、自分あまりにも浅学非才到底その任ではない、という  
考えが浮んでくる。しかし何といってもこの中でかくも長い間  
子どもとともに生活させてもらった者としてはやはり、その間

のことを何かの形で残しておく義務がある、とも思えてくる。  
そこで、後世何人かがするであろうそのときの、いくらかの  
参考にもなればどのかすかな願いをこめて、説得に屈し、遂  
に引きうけることにしたのである。

お引きうけはしたものの、このような時がくるとも考えず、  
机や抽出しが、積る荷物でところ狭くなるたびに、いまから思  
えばまことに尊かった自分個人の保育日誌や予定案などはこと  
ごとく捨て去ってしまったのである。いまになって書こうにも  
たよりになる記録がない。そこでやはりこの理由を述べておこ  
とわりした。すると編集部曰く、いちいち細かな記録を挙げる  
ことはむしろ煩わしい、記憶に浮かぶものだけを書く方が却っ  
ておもしろいではなからうか、といった工合の説得に、とう  
とう根負けしてしまって、それならばということでお引きうけ  
してしまつた次第である。

大正十三年——同十五年

就職の前夜

そのころの職員

当時の園の組織編成

子どもの服装・先生の服装

保育のこと

保育案・一日の流れ・保育の形態・その他

行啓の思い出

幼稚園令の公布

以上のような順序ですすめていこうと思う。

就職の前後・就職の動機

さて私をはじめて幼稚園に職を奉じたのは東京女子師範学校を卒業してすぐの大正十三年の四月である。ちょうど関東大震災の廃虚の中で茫然自失、なすところを知らずという状態から目ざめて、人びとは漸く立ち上ろうとしているときであった。

震災で女高師とその附属の高等女学校、小学校、幼稚園はことごとく灰燼に帰し、九月十日からは第二学期は到底始められなかった。高等女学校は学習院に、小学校は教育大学の附属小学校に、幼稚園は大塚なる帝國女子専門学校に、女高師の方は同じく帝國女子専門学校と府立第五高女にそれぞれ借家することがきまって、第二学期が始まったのはたしか十一月一日からだったと思う。

女高師とその附属の、平屋のバラック建がまがりなりにもでき上って、一家中がやっと同じ構内に住めるようになったのが震災の翌年の四月からである。私が幼稚園に勤めることになったのはちょうどそのときなのである。

私は女高師在学中はやや生意気な生徒であったと思う。家政

科に入学しておりながら、その方の学問の知識や技術を学んだり身につけたりはしようとせず、宗教に走ったり、文芸思潮とか思想の方面のことに興味をもち、そうした傾向の書をあさりむさぼっていた。

科学的な根拠に立脚していない、そして常識的なことでしかない当時の家政学を、高等女学校や女子師範学校の生徒に教えるなどということは、とても大それたこと、自信のないことではなかった。常々どうかして別の学問にかわりたいものだと思っていた。ちょうどその矢先きである。卒業も間近いある日のこと、倉橋先生に呼ばれて、

「卒業したらこの幼稚園のこらないか」

といわれた。私は即座に「はい」と返事をした。

私は女高師の三年から四年にかけて、倉橋先生から、「家庭教育」と、「幼児教育」「児童心理」のお講義を伺った。広い視野に立っての先生のお講義は、とてもおもしろく、いつも先生のお授業のある日を待っていたものだった。

先生の講義の中に出てくる話題は哲学、宗教、美術さては演劇にも及ぶ広範囲のもので、私も生徒の心情をつねに広い世界へ開眼させ、そして向上させてやろうとのお考えのようであった。

これについて思い出されることがある。それは相対性原理の

世にさわがれだした頃、ちょうどそのご本人のアインシュタイン博士が、わが女高師を訪れられたのである。もやにかすんだ月あかりの晩だった。お茶の水の赤いじゅうたんの敷きつめてある焼けない前のあの講堂の壇上に立たれた白鳩のような偉大なる学者、アインシュタイン博士の風ぼうと、もやにかすんだ月あかりとが何となく調和して見えたものだった。ドイツ語の講演はほとんどがわからなかったが、ところどころにイッヒとか、ダンケとかでてくると、やっと博士の気持ちにくらかでも触れることができたような気がしてうれしかったものだった。

講演もすんでやがてお帰りになれるとき、感激した生徒たちは講堂の前に立ちふさがって、博士の自動車はしばらくは進むことができなかったのである。

翌朝の朝礼のとき、舎監の先生から、昨晩の博士に対する非礼をいましめられ訓戒があったのであるが、午前十時からの倉橋先生の講義の時間には、先生からは、

「ゆうべはみんな、アインシュタイン博士を帰さなかったんだってね、いいことをしたね」とおほめにあずかったものだった。先生は、偉大なる学者にふれた若い学生の感激をたいへんよろこんで下さったものだったと思われる。この先生が、教室だけでのコツコツした勉強ばかりをよしとせず、常に広い世界へと導いて下さったおかげで、このころ相次いで来日したバイ

オリンのエルマンとかクライスラー、ジンバリスト、さては若い天才バイオリニストのハイフェッツ、ピアノのゴッドウィスキーなどの至芸には、何が何でも接しようとしたものだったのである。

倉橋先生の名は女高師入学の前から知っていた。というのは私より二つ年上の姉が同じ女高師に在学しており、倉橋先生のお講義のおもしろいことなどを休暇で帰省するごとに聞かされていた。授業時間だけでなく月に二回ぐらい、土曜の夕食後など寄宿舎にこられて、寄宿の生徒たちにお話をしていたようであった。あるときは修養に関したお話、あるときは宗教についてのお話などのものであった。いまでも覚えているのは、

「人を裁くなかれ」という題でなされたお話はとても生徒たちを感激させたようで、このお話の概要を当時女学生であった私に、姉が送ってくれたものだった。こんなことで私は入学以前から倉橋先生の名はちゃんと頭にはいつていた。私が入学した頃は先生は外遊中であつたが私が三年のときの三月の末頃御帰朝というので、上級生たちがみんな横浜までお迎えにくいのを見ていた。こんなふうにして、私もまた倉橋先生を崇拜する生徒のひとりだったのである。だから先生から「幼稚園のころないか」といわれたとき即座にお返事をしてしまったわけなのである。崇拜する先生のそばにいられることと、それから常日頃

いやだと思っていた家政という専門から逃れられること、そして日本の文化の中心である東京にいられるということが瞬間にひらめいて、「はい」という即答になったわけなのである。

よくいまの時代の若いひとたちは幼稚園就職の話などをもちかけると、「私は幼稚園に勤めてやっていけるでしょうか」とか、「私の性格は幼稚園に向かないのではないか」などいうのであるが、「幼稚園にのこらないか」といわれた瞬間、私は、「幼稚園のことはできるだろうか」とか、「性格は幼稚園向きだろうか」などということは、これっぽかしも考えなかった。しかも自分では、弟妹にも親せきにも幼児という年令の子はひとりもないのに以上のようなためらいや疑問などはいささかも浮んでこず、ただただ倉橋先生の許にいられるということと、家政科から離れられるということ、東京にいられるということ、私の幼稚園就職が即決してしまったわけであって、国のためになるとか、子どものためになるなどを考えめぐらす余裕はなかったのである。自分はまことに罪深いエゴイストであったわけである。

私が幼稚園の先生になる、と報告したとき、父は「師範学校の先生になれるのになあ」と、少々歎き気味だったし、女高師の四年のとき、教育実習で教えた附属の高等女学校の生徒たちが、お昼休みのとき三三五五肩をくんで幼稚園の庭に遊びに

くるのであったが、そんなときなど、

「先生、幼稚園の先生になんかあったの?!」と、これも少なからず見下げたようながっかりしたような思わくが読みとれる言葉であった。がしかし、これらは、つまり当時の幼稚園の教師の地位の低さを物語る言葉や態度ではあるが、私には何のひびきも与えなかったのである。

#### 就職

私は大正十三年三月三十一日付の辞令で、先輩坂内ミツ先生の後任として就職した。だから坂内先生が担任しておられた組をひきついで担任したわけである。海の組といい、五才児であった。

#### 同僚

その頃の職員は、倉橋先生を主事にいただき、主任の及川先生、次に新庄先生、崎山先生、小山先生、桑原先生、星先生、私という女性七人のメンバーであった。

#### 園舎、設備など

現在の東京医科大学の全敷地が東京女高師の校地であり、園舎は校地の西北の位置にあった。平屋のバラック建てで、南側に保育室（二〇坪）が六つならび、廊下をへだてて北側に小使室携帶品置室、職員室、衛生室、遊戯室などがあり、廊下を西に突き当たったところに便所があった。

各室にはオルガンが一台と若干の積木、ままごと道具などがあつた。ただ私の隣りの室（五才児・山の組）にだけは震災で焼失を免れそして代々の子どもが運よくお茶の水の幼稚園にきていたという家庭からの奇贈の、古い型のピアノがあり、遊戯室には新しい堅型のピアノがあつた。

#### 組織・編成のこと

この頃は幼稚園の中に一部というのと二部というのがあつた。一部の方は四才が二組、五才が二組である。四才の森の組が大きくなると山の組（五才）になり、四才の川の組が大きくなると海の組（五才）になるのである。二部の方は、四才が池の組、五才が林の組というのであつた。

二部の方は、本来ならば四才五才を混合して、二部保育をするのが主旨であつたのであろうが、私が就職した頃は、四才と五才は別々に一組を形づくっていた。しかし何かにつけて、二部は、四才と五才がいっしょに何かをすることが多かつたようである。

一部と二部のもう一つのちがいは、保育料がちがっていることである。その当時一部は一ヶ月三元、二部は一元である。

創設当時は、二部というのは、現在の保育所的な意味あいのもので、保育に欠ける幼児を收容するのがその目的であつたようであるが、私が就職した頃は、こうした一部と二部のはっきり

りした区別はほとんど消えてきつた時代である。一つの構内にいくら建物も別であっても、こうした異質のものが同居していることは種々の問題をはらむことで決して望ましい姿ではなかつたときいている。即ち、ときとして二部の幼児と一部の幼児とが対抗して石などをぶつけあつたこともあつたとか。

最初の出發の次元においては、研究とか、あるいは保育に欠ける家庭の幼児を預つて母親が後顧の憂なく仕事に打ちこめるようにといった、社会福祉的な考えもあつたのであろうが、結果としてはうまくいかなつてきたようであつた。

私の就職した頃は、保育の内容などは一部の組とは少しもちがわななし、担任の先生も順ぐりに代りあうようになったので、この点でも何のちがいがいもなくなつたのであつたが、昔から流れてきた二部という觀念的なものと、現に保育料が安い（一部は月額三元、二部は一元）ということでもやはり二部に入るのを好まない家庭もかなりあつた。その証拠には、入園志望書をだすとき、大体の家庭では一部と二部とを合わせ希望するのが普通であるのに、二部を志願しない家庭は三十名ぐらゐあつたのである。こんな状態は年を経るにしたがつて少なくなり、ほとんどが、たとえ月謝は安くても二部を特別視しないようになってきた。

それから一部と二部のもう一つのちがいはここの小学校への

進学についてである。

一部については特別体が弱いとか、知能が皆といっしょに進めない程度に低いということでもなければ、原則として男女児とも無試験で進学できるのに対し、二部の幼児の進学については厳正な入学試験が行なわれたのである。年によっては女兒など半数以上もこの附属小学校に進めず、うらみをして他の小学校へ行ったものである。二部を担任した場合など、まことに不思議な制度だと、保護者とともにこの制度をのろったものだった。この保育料が一円であること、小学校への進学についての制度は、第二次世界大戦の終戦前までつづいていた。

#### 服装

子どもたちはみな洋服にエプロン着用。着物を着てくる子どもは一人もいなかった。ただ病気のあとなど、着物に被布をきてきた子が稀にはあったが、他の子はそれを珍しげにみるという様子もなかった。

#### 教師の服装

先生方はみな着物に袴をつけ、水仕事をするときなど袖が邪魔になるのでたすきをかけていた。袴にたすき姿、そしてどうりばきはその当時の先生の服装であった。先輩の貫禄のついている方々は、濃紫色の節のあるつむぎ織りの羽織をお召しになっていた。参観人が見えて若手が応接にでると、「どなたか先

生に面会させて下さい」といわれることがよくあった。こんなときなど、一人前に扱われない弱輩たちは「紫の羽織を着てこない駄目だわ」という言葉が合言葉になっているほどであった。この紫の羽織はひとり幼稚園の先生だけでなく、附属の小学校、高等女学校などの中年以上の方々もみんなお召しになっていたものであった。

卒業した年の夏六月頃私は水色のボーラー地でワンピースを手製して着用した。及川先生も新庄先生も崎山先生も洋服にさきった。及川先生は薄紫地にしま模様ブラウスに濃い茶のスカート、新庄先生のは装飾もついでいて、私たちが「パリ婦り」といったほどの華やかなものだった。校門で下田次郎先生（現下田外務次官の尊父）にお会いしたら、下田先生は何もおっしゃらずにやりとなさった、と新庄先生が笑って話していらしたのを今も思いだす。

この年の夏はどういう風の吹きまわしか職員室は洋服の大流行だったがこれっきりでそれ以後はほとんど洋服姿は見られず、袴たすきの先生方の服装は大東亜戦争の終りまでつづいた。もともと戦争が苛烈になるや袴たすきでも通らなくなり、男子は国民服、女子は年輩の者ほんべ着用、若い層はスカートを廃してことごとくずばんばきといういでたちになった。（つづく）

（お茶の水女子大学附属幼稚園）